

場面や状況に応じて話す力を育成する指導の在り方（二年度）

～即興で話す活動の充実をめざした「逆向き設計」に基づく指導計画の工夫を通して～

矢吹町立矢吹中学校 福島県教育センター長期研究員 松本 聡二

1 研究の趣旨

- (1) 新学習指導要領で求められる評価方法の充実と改善について
新学習指導要領で求められる「資質・能力」を育成するためには、「何ができるようになったか」を確認するために学習評価の充実・改善を図ることが重要である。「何ができるようになったか」について適切に評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で多様な活動に取り組み、パフォーマンス評価を取り入れるなど、多面的な評価を行っていくことが必要である。英語の4技能において、とくに「話すこと」に関しては、目標に対する達成状況をペーパーテストで把握することは困難であるため、実際に話すことを求めるパフォーマンス課題が必要となる。パフォーマンス課題の達成度を測るためには、ルーブリックのような指標が必要となるが、評価規準・基準の妥当性を高めるため、複数の教師で作成し評価することが求められる。
- (2) 昨年度の実践から
昨年度は、場面や状況に応じて話す力を育成するために、段階的に即興で話す活動に近づけるよう指導過程を工夫しながら指導を行った。対話的な学びや個人での振り返りの時間を設けながら「話すこと」の指導を継続することで、生徒は個々の言語活動に意欲的に参加し、発話量の伸びがある程度見られた。しかし、教師が、最終的に到達させたいゴールを生徒に明確に示さなかったためか、自らの課題に向けて主体的に言語活動に取り組む態度を十分に育成することができなかった。また、言語活動の目標に対する評価規準・基準もあいまいだったため、活動後の感想を見ても、「楽しかった」、「緊張した」などと抽象的な内容が多く、目標に沿った具体的な振り返りは少なかった。そこで、上記の課題を改善するために、以下に述べるような仮説を設定し、本主題に迫った。

「話すこと」の指導において以下のような視点に基づき、生徒と教師が共通の目標を見据えながらルーブリックを共有し、定期的に目標に対する達成状況を把握しながら指導と評価の一体化を図れば、場面や状況に応じて話す力が育成されるだろう。

【視点1】「逆向き設計」に基づいたCAN-DOリストとルーブリックの作成・共有

【視点2】即興で話す活動の繰り返しと振り返りにより、気付きを促し改善につなげる単元計画の工夫

2 研究の概要

- (1) 逆向き設計に基づいたCAN-DOリストとルーブリックの作成・共有
 - ① 「逆向き設計」による指導計画作成の考えに基づいてCAN-DOリストとルーブリックを作成し、指導に当たることとする。指導に当たる際には、CAN-DOリストの目標やルーブリックの評価規準・基準を生徒と共有し、最終的に到達をめざすゴールを常に生徒に意識させながら、一つ一つの単元の中で行う即興で話す活動に取り組みさせる。
 - ② 求められている結果からさかのぼって指導計画を作成する。その次に、目標に対応する評価方法とその指標を明確にしてから言語活動の指導方法を構想する。
- (2) 即興で話す活動の繰り返しと振り返りにより、気付きを促し改善につなげる単元計画の工夫
 - ① 即興で話す言語活動は生徒にとって難易度が高いため、一度やって終わるのではなく、繰り返し行うことで話すことの熟達化を促す。
 - ② 自分で気付き、課題の解決に向けて主体的に学ぶ単元計画を構築することで生徒の発話量を増加させる。また、タブレット端末などのICT機器を活用し、録画した発話の様子をペアやグループで振り返り、気付いたことを共有できるようにする。

3 成果と今後の課題

- (1) 研究の成果
 - ① 即興で行うALTとのインタビューテストを見据え、授業内でも帯活動と即興で話す活動を計画的に取り入れることで、系統的な指導につなげることができた。
 - ② 英語科の教科部会の中で評価規準・基準の改訂作業を行ったことで、教員の同僚性を高め、ある程度妥当性のあるルーブリックを作成することができた。また、生徒たちにもルーブリック改訂作業を経験させたことで、評価規準・基準について理解を深めるとともに、自己の課題についての気付きを促し、主体的にインタビューテストに臨む姿につなげることができた。
- (2) 今後の課題
 - ① 振り返りに重点を置きながら言語活動を繰り返し指導することで、発話能力に一定の伸長が見られたが、より効果的な振り返りの方法や、言語活動を繰り返す中での適切な負荷の調整の仕方については更なる研究が必要である。
 - ② 少しずつ慣れてきたとはいえ、即興で話すことは、生徒にとって負荷が高い活動である。したがって、CAN-DOリストやルーブリックを作成・活用する中で、英語科の教員が、生徒に3年間で身に付けさせたい即興で話す力を共有し、組織的かつ計画的に指導を行って行く必要性を感じる。